

# BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

東本願寺佐世保別院・報恩講での講話 2016年11月

Speech At HIGASHIHONGUANJI, Sasebo

2016年(平成28年)11月4日、馬場崎研二は真宗大谷派(東本願寺)佐世保別院での報恩講に招かれ、講話をおこないました。以下はその概略です。

この度、報恩講期間中に講師としてお話をするようにとのご依頼があり引き受けさせていただきました。私は長年インドに暮らしていましたが七年ほど前、生まれ故郷の佐世保に帰り、仏画師として生活している者です。僧職でもない私が、浄土真宗や親鸞聖人の教えに関する話ができるはずもありませんが、もともと私の家は代々真宗門徒ですし、亡き母の法要の折にたまたま現輪番の武宮様と出会い、そのご縁が今回の事の運びとなりました。慣れてもない、且つ私には分不相応な場とは承知しておりますが、仏縁と思い勤めさせていただきます。

私は仏画師といっても、インドであるチベット人仏画師に出会い、以来三十年余り、師事して教えを受けました。在住していたのはインド北方の地ダラムサラです。ダライ・ラマ法王が在住されているところです。それ故私が描く仏画は、チベット仏教と深い関連があります。その点同じ仏教国である日本とチベットでは仏画にどのような表現の違いがあるのかなどの解説を通して、同じ仏の教えであることを共に理解できれば幸いと思っております。



今日はいくつか作品をもってまいりましたがまずは六道輪廻図についてお話をさせていただきます。これは仏教の根本理念である輪廻転生という思想を一枚の絵に表現したもので、チベット仏教ではまず仏教入門の第一歩として大いに説かれるものです。もとの由来は仏弟子の一人である大目犍連が、自分自身が目撃した六道界での苦悩と喜びを語り聞かせると、この因果の法則に魅せられて沢山の弟子が仏陀の下に集まることとなりました。これらの弟子たちの求めに応じて釈迦牟尼仏陀は、現在までも仏教世界で続いている習慣である、この彼自身が図示した六道輪廻図をお寺や寺院の入り口に描くことを許した、とされています。あくまでもチベット仏教ではそのように解かれている、ということです。

# BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA



閻魔王ヤマ・六道輪廻図 / Wheel of Life

Opus-13 1982 (73 x 56 cm)

この図はあたかも丸いテレビの画面のような形をし、おそろしい形相をした死の神ヤマが抱え持っています。この図の絵解きは、円の中心にある赤い部分から始まります。ここには蛇・猪・鶏が描かれ、各々瞋・痴・貧を象徴し、それらが一匹ずつの尻尾をかみながら円の中をいつまでも回り続けている。このことは、次の第二の円の中に描かれている内容の原因となる。ここには抑制がきかないこれらの三つの心の毒によって引き起こされた他人を害するような行いが、結局は自分自身をまるで悪魔に引き寄せられるかのように、増々悪い状況とか悪い転生へと導くことになるということが右半分の黒い部分に描かれています。左半分の白い部分では、これと反対に心を改善し、他人に対する慈しみの心を起こすとより良い転生が得られるということを解いているのです。

さて、これらの転生がどこになるのかは、その外側の一番大きな部分に描かれています。

(1)一番下の扇型では、人間の皮の上に座ったヤマが鏡を持っている。彼の前には、小さい人間が一人跪いている。彼の運命は、死の神の従僕である恐ろしい動物の頭をした二人によって決定されようとしています。一人が生前の行いを読み上げ、もう一人は秤をもって善行と悪行との重さを計っている。中有の状態にある者たちは、ヤマが手に持つ鏡に映し出される生前の自分達の行いを目の当たりにすることになります。のこりの部分には灼熱地獄と寒冷地獄を描いてあります。

# BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

(2)これよりもややましなのが、その右に描かれている餓鬼界。

(3)もしくは、その左側の畜生界。この場面は誤解を招き易いが、要は一般動物達が生きるためにいつも他を殺したり、襲われる危険にさらされている恐怖の状態にあることを示しているのです。

(4)上部左側は、嫉妬深い阿修羅界を描いてある。一本の木が自分たちの地上から生え育ってはいるが、その肝心の魔法の果実は隣の天上界でのみ獲ることができるので、嫉妬にかられた阿修羅達は常に戦いを止めることができないのです。

(5)この天上界の住人は、自分たちが永遠に生き続けるのではないかとも思える長い期間を至福に満ちた生活をおくることができる。けれども、ここに至るにいたった善行もやがて尽き果て、結局はより劣った下界へと落ちて行くゆくことになる。

(6)人間界への転生は、この因果の法則を逆転させることができる生まれ変わりという意味で、天上界よりも好ましいものとされている。この期待は、寺院とその中庭にいる三人の僧侶によって表されている。そして、彼らが教えた一つの根本的な法則は、一番外側の円に図示されているのです。ここには縁起の様が、無名・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死、の順に描かれています。

チベットでは仏教を勉強する者は、よくこの因果の法則に思いをこらし、どのようにしてこれらのものごとが輪廻転生して止むことがないのかの有様を考えるべきである、と教えられます。けれども一番大事なのは、このタンカの一番右上の仏陀が示すように、如何にしてこの因果過程を逆転させ、悟りへと導くかということなのです。仏陀は左側を

指し示しています。その示す先には慈悲を象徴する観音菩薩が描かれているわけです。



研二の話はまだまだ続きますが、長くなるのでここで割愛させていただきます。この日は他にもいくつかの作品をプロジェクターで表示し、チベット仏教では今でも信仰の対象として大切に崇められている、原始仏教、仏教の根本原理といった点について語りました。タンカを見ながらの絵解きというかたちが好評で、とても分かりやすかった、といった声が多く聞かれました。上の写真は「仏伝図一四門出遊」を題材に釈迦牟尼王子の出家前後の故事を説明する研二。